第 140 回プリオン専門調査会
資料３より

参考資料４

第 139 回プリオン専門調査会における

食品健康影響評価のとりまとめに向けた方向性に係るご意見概要

◆ **脊柱をＳＲＭから除外することにより、想定されるリスクは、非定型ＢＳＥに係る各種知見を踏まえれば、現状に比較し相対的に高くなると考えられる。**

◆ **一方で、以下の事項も考慮すべき。**

-非定型 BSE の発生頻度は非常に低い。

-リスク管理措置が有効に機能している。

-ばく露量は非常に小さい。（加工工程等で感染価も下がる）

-臨床症状を呈した牛はフードチェーンから適切に排除される。

-種間バリアの存在

-H-BSE の人への感染を示唆する報告は確認されていない。

-実験動物における知見では、経口投与は感染確率が低い。

◆ **その他の懸念事項及び留意すべき事項**

-非定型 BSE に係る知見が乏しく、科学的不確実性が高い。

-人における疫学情報及び種間バリアについては、結論付けることは困難。

-SRM 範囲の変更に伴うリスクの変化については、経時的観察が必要。

-CJD の発生動向、食品での利用状況に引き続き注視が必要。

-ハザードのばく露に係る最悪のシナリオは実際には起こりづらいことを考慮。